

鶯

さく梅の木の下風の朝戸出にこゑこそ匂へ岡のうぐひす

發句

遠山の花に風まつ霞かな

峰の雲かすめば花の朝戸かな

春夜の月

梅が香に雲の衣やにほふらんそれとぞかすむ春の夜の月霞む夜の月の光にしらけり里はあまたの梅のほひにそことなく心をさそふ月の色にまた浮れ行く里の梅が香おぼつかない臍にかすむ雲間より影さへ細き春の夜のつきかすむ夜の月にぞしたふ故郷のふるき軒端のうめの匂を霜さゆる軒にうつろふ夕月夜おぼつかなくも霞む春かな一、雨を詠める歌その他

九日閑。雨

春雨の降るは霞にわかねどもそめし草木の色にしられて中原直方の許より、梅花をたうべける消息のついでに。我宿に匂はざりせば梅花のたまち居し春のかひあらましを

梅

降りつみし軒端の雪に荒れまさる垣根も春と匂ふ梅がえ

梅

折てみむたよりなき身を侘る間にのみ立枝の梅の初花

幽棲春月

人めかれ柴の袖垣あれしかどはるとや月の猶かすむらん

遠山花

霞して遠山さくらさきぬらしいく里かけてにほふ春かぜ

残花

天津空みどりぞつづく山の端にたえぐ残る花の白くも

む月十餘日舊栖にして月を詠

詠つゝ思ひもあへぬ袖のうへにいっしか春の月ぞ宿れる

折から松風のおとづれば

むかし思ふ涙の露の玉琴にしらべやかはす軒のまつかぜ

惟明許より古本拾遺愚草令借看所々見侍りて

春ながら思ひたえにし山里も花には人のわずれざりけりおのづからいとふともなしとふ人の道たえ初る雪の山里つらゝぬしそともの柳露見えてみだれぞ初る今朝の春風梅が香にさゝで休らふ柴の戸を明るまでとや月の霞める

色にそむあだし心の雪きえてさやかに月をみる由もがな

思ひ川よしたえやらで流るとも心の水の上よどますもがな

惟明の許へ拾遺愚草返進の序書て遣しける

月影は入にしかども小ぐら山その名疊らぬいにしへの空

一、獨り月を詠めて

二月廿日駒込にて獨り月を詠めて

故郷の春の梢を思ひ出てひとりぞみつるむさし野のつき故郷の軒端の花もいかならんつきにぞ思ふ春のよなくあすしらぬ命と思へどしかすかに兼て名残の惜き春かなかねてより侘しくも有か今はとて春暮はてん入逢のこゑ枕かる草のはつかに影ふけて霞かゝれるむさし野のつき一、落花と歸雁を詠める

二月廿四日山の落花と云題にて

あやにちる花こそ雪のみ山邊に消すは有とも惜き春かなくる人もなきこそ殊にあはれなれ柴屋の軒の青柳のいと花見にはむれてゆけども青柳の糸の許にはくる人もなし冬を経て荒しかりいほ其まゝにのこる山田の春の夕ぐれ今夜丹直清入來、對閑燈談往事。于時雲外歸雁聲至。

燈下支枕聽之。不堪感興述即事。

霞とち浮雲まよふ雨のうちに聲もしほれてかへる雁かな

雨中歸雁

半夜雲深何處歸。陰雲寒雨可難飛。一聲忽動故郷思。燈下

寂寥沾客衣。

音づれて中々さびしゆく雁のこゑ遠ざかる夜半のはる雨

歸雁

さく花のかすみに薫る春の日にしづ心なくかへる雁かな

一、種重、上野の花見にまかりて

廿五日種重の許せうそこ落手す。上野の花見にまかりけるに、むかしの思ひいでられて、かくつかうまつれりとて聞えし。

武藏野やいづくはあれど古へを忍ぶの岡の花のゆふかけ打かすむ尾上の花に鐘鳴りていり日の跡の雲のしづけき

かく聞えてむかし思ふやなど聞えけるまゝ

いにしへの春を忍ぶの岡なれば花に心のそはぬ日ぞなき心あらば面影にそへさく花になき名忍ぶの岡のまつかぜ一、種重の許へ消息すとて